

[Report]

Grief Care by Visiting Nurses During their Visits to Bereaved Families

— A Qualitative Analysis of Records Prepared by a Visiting Nurse Station on Visits to Bereaved Families —

Tomoko Hori*, Atsumi Nakajima** and Nami Nishida**

* Department of Nursing Faculty of Health Science, Aino University

** Visiting nursing center Meiwa

Abstract

A visiting nurse station, which has performed deathwatch at home, has many visiting nurses who have been employed for a long time and provided stable visiting activities. We hypothesized that deathwatch at home, visits to bereaved families, and grief care by the station may have implication for such stable activities and qualitatively analyzed records on the care. Results showed that nurses from the station provide [grief care] through politely [promising to visit to a bereaved family], listening to and talking with [bereaved family members], and [thinking of the deceased]. We also found that visiting nurses spend precious time to provide the care and then to write it down as a person concerned like a bereaved family member who lost a loved one.

Key Words : Home clinic, Greycare, visiting nurse, ability development

訪問看護師が実践する遺族訪問における グリーフケアに関する研究

—— 訪問看護ステーションの遺族訪問時の記録の質的分析より ——

堀 智子*, 中島 淳美**, 西田 奈美**

【要 旨】 在宅看取り実績のある A 訪問看護ステーションは多くの訪問看護師が在籍しており、継続就労年数も長期で安定した訪問看護活動を行っている。我々はこの訪問看護ステーションが行っている在宅看取りと遺族訪問、グリーフケアが影響を及ぼしているのではないかと推察し、グリーフケアを行った後の記録に着眼しその記録の質的分析を試みた。結果、訪問看護師は丁寧な【遺族訪問の約束】を行い、【遺族たち】の話を聞き、話し、【故人を偲ぶ】ことで【グリーフケア】を行っていた。さらに、グリーフケアを行い、また書き記すということは遺族とともに大切な人を亡くした当事者として訪問看護師として大切な時間となっていることが分かった。

キーワード：在宅看取り、グリーフケア、訪問看護師、能力育成

I. はじめに

2025 年以降の多死社会に対応し、在宅看取りという点において、看取り難民支援のために約 2 万人の訪問看護師の増員が必要と指摘されている¹⁾。看護職員全体の就業者数の増加は見られている一方で、訪問看護ステーションへの就業は全体の 2 割にとどまり、近年の動向ではその数に大きな変化は見られていないのが現実である²⁾。

このような訪問看護師の養成ニーズと実働に関する不均衡について訪問看護が提供される場の特殊性が挙げられる。つまり、訪問看護は病院とは違い、限られた空間である療養者宅へ看護師単独で訪問することが多く、契約された時間内で療養者の状態判断、家族を含む周辺状況も広範囲にかつ瞬時に捉え、次回訪問ま

での予測性の高いケアを行うという高い判断能力と実践能力が要求される。このような環境が訪問看護師のストレスになり、就労を敬遠する原因となっているのではないかと考える。

訪問看護師のストレスについて個人要因や労働環境、職場内の人間関係と研修体制、職場外の要因などが指摘されており³⁾、その対応に地域療養を支える訪問看護師の育成として働く労働環境の整備といったハード面と、訪問看護師自身の成長を保障していくソフト面双方の整備が必要であると言われている⁴⁾。

このような中、在宅看取り実績のある A 訪問看護ステーションは訪問看護師が 20 名近く在籍しており、スタッフの継続就労年数も 4~5 年と安定した訪問看護活動を行っている。さらに、在宅看取りとそれに関連した遺族のケアのグリーフケアにも力を入れている。

* 藍野大学医療保健学部看護学科

** 医療法人明和病院訪問看護センター明和

私たちは A 訪問看護ステーションのこのような看取り時の看護体制の中に訪問看護師の成長を支え、就労のモチベーションを支える力が埋め込まれているのではないかと考えた。そこで、遺族訪問・グリーフケアを行っている A 訪問看護ステーションの記録を分析していくことで、訪問看護ステーションにおける遺族訪問の実態及び訪問看護師が行う遺族訪問、グリーフケアの意義、ひいては訪問看護師の成長を保障する要因が明確になるのではないかと考え研究に取り組んだ。

II. 目 的

A 訪問看護ステーションのグリーフケアの実施内容を分析し、訪問看護師が実践しているグリーフケアの詳細を明らかにする。

III. 方 法

1. 調査対象

平成 19 年 4 月～平成 29 年 4 月までのグリーフケア用紙 (325 件) の記載内容のうち自由記載にあたる「実施内容」

2. 研究期間

2017 年 5 月～2017 年 10 月

3. 分析方法

KHCoder を用いての計量的テキスト分析

4. 倫理的配慮

本研究は研究代表者と協同研究者が所属する倫理委員会での倫理審査にて承認が得られている(藍野大学倫理委員会第 2017-005 号 明和病院倫理委員会第 29-14 号)。グリーフケア用紙に関しては個人が特定できないように個人が特定される部分に関しては黒塗りをして、データ収集に際しては個人が特定できないように ID 化を行った。得られたデータについて鍵のかかる書庫での保管をし、データが外部に漏れないようにした。

5. 利益相反

本研究にかかる利益相反はない。

IV. 結 果

グリーフケア用紙記載の記載者は全員訪問看護師であったが、なかには介護支援専門員といった看護師免許以外のものを持っているものもいた。総計 23 名の訪問看護師がグリーフケア用紙を記載し、訪問看護師たちは最大 44 件、平均 14 件のグリーフケア用紙を記載していた。これらのうち総抽出語 44899 語、2354 の文を分析対象とした。

頻出語は「訪問」360 回、「話す」198 回、「看護」185 回、「介護」168 回「娘」149 回、「妻」145 回、「様子」143 回、「亡くなる」141 回、「入院」138 回、「焼香」134 回などであった。頻出語の上位 150 語の多くは名詞で占められており、動詞の出現は 27 語 (18%) であった。

ついで、動詞に着眼してみると、動詞のみの出現回数 10 回までの 60 語のうち、訪問看護師が主語である「話す」「言う」「思う」「聞く」などは 30 語 (50%) であった。残りの半分の 30 語は「過ごす」「看取る」「落ち着く」「迎える」「頑張る」などの故人もしくは遺族が主語の動詞であった。

さらに複合語としては「訪問看護」83 語、「娘さん」40 回、「ご本人」36 回、「入院中」29 回、「ご主人」26 回、「献花・焼香」26 回などの出現が多く見られた。

ついで対応分析による散布図では「訪問」「話す」「介護」「娘」「妻」「様子」などの語が中央にプロットされていた。

これらの上位の頻出語と、グリーフケアのキーワードに対して関連語検索を行った結果を頻出語で多くの出現が見られた「訪問」「看護」「話す」と動詞の頻出語で見られた「聞く」に焦点を当てて、共起ネットワークでその関連性を見た。

まず「訪問」には、「看護」「焼香」「献花」「話す」などの語に強い関連性が示された(図 1)。さらに、「献花」「焼香」には「悔やみ」が連なり、さらに「連絡」へとつながっていた。また、「連絡」には「前」「電話」が連なっていた。グリーフケア用紙内の記載例としては「『ぎりぎりまで自宅で過ごすことができ良かった。何があってもすぐに訪問していただいたので良かったです』との言葉を頂く」「事前に連絡し日時決定の上、ケアマネと担当看護師で訪問し、お悔み・焼香・献花をさせて頂く」などの記載があった。

ついで「看護」には、「訪問」に強い関連性が示され、「感謝」「話す」「言葉」などの語と連なっていた

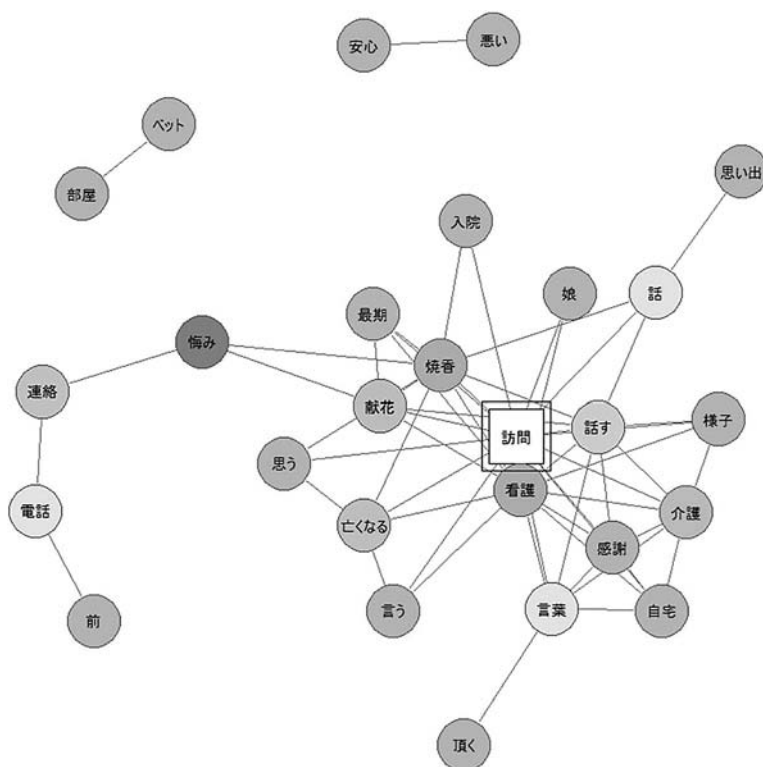


図1 「訪問」の共起ネットワーク

(図2)。具体的な記載例としては「感想などを伝え、また家族の介護をねぎらう。家族からは生前の思い出と訪問看護に対する感謝を述べられる」という記載があった。

また「話す」には、「訪問」「献花」「焼香」「最後」「様子」「娘」「話」などに共起関係性が示された(図3)。また、「笑顔」「見る」「仏壇」「花」「写真」「飾る」などの語が相互に関連して出現していた。記載例としては「焼香・献花施行。妻は髪型を変え、新たな就職を探していることを話す」などがあった。

最後に、「聞く」には「最期」「介護」「入院」「献花」「焼香」などの言葉に関係性が強く表れていた。さらに、「介護」に関しては「後悔」「仕事」「葬儀」「体調」「表情」という語に関連性が見られ、「表情」には「穏やか」という言葉が連なっていた。(図4)。

クラスター分析により、8個の構成要素にまとめられた(表1 図5)。8個に分類されたそれぞれのクラスターについて述べる。クラスター1は「焼香」「献花」「妻」「亡くなる」「言う」「思う」「家」という7個の言語によって構成されており、それらの言葉よりクラスター1を【弔問】と名付けた。次いでクラスター2は「頂く」「言葉」「感謝」「本人」「自宅」「介

護」「訪問」「看護」「様子」「話す」の10個の言語で構成されており、その内容より【訪問看護への感謝】と命名した。クラスター3は「前」「連絡」「電話」「故人」「悔み」の5個の言語で構成されており、【遺族訪問の約束】とした。クラスター4は「傾聴」「退院」「状態」「入院」「希望」「在宅」「最期」「看取る」「気持ち」「家族」「過ごす」という11個の言語があり、その内容から【グリーンケア】と名付けた。クラスター5は最も多い単語で構成されており、その内容は「息子」「今」「時間」「落ち着く」「涙」「自分」「夫」「生活」「娘」「行く」「笑顔」「見る」という12個の言語があり、【遺族の現在の様子】と命名した。クラスター6は「思い出」「話」「生前」「写真」「元気」の5個の言語で【個人を偲ぶ】というタイトルをつけた。ついで、クラスター7は「行く」「退る」「長男」「喜ぶ」「母」「お世話」「本当に」「奥様」「来る」の9個の言語があり、【遺族たち】と名付けた。最後にクラスター8は「奥さん」「主人」「今後」「表情」「満足」「葬儀」「病院」「聞く」という8個の言語で構成されており、【葬儀後の遺族】とした。

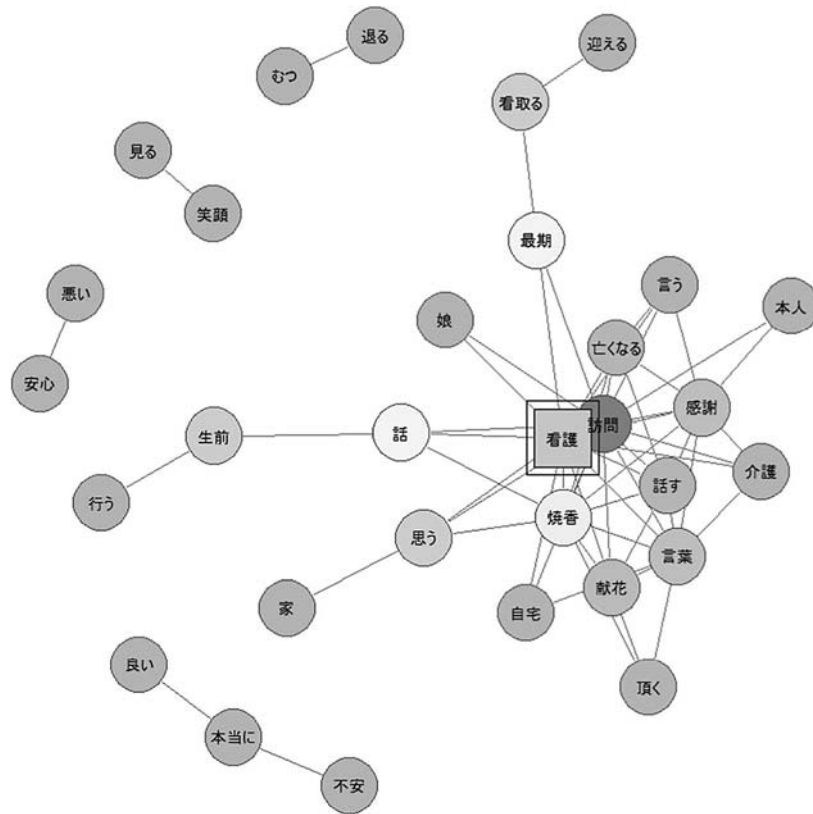


図2 「看護」の共起ネットワーク

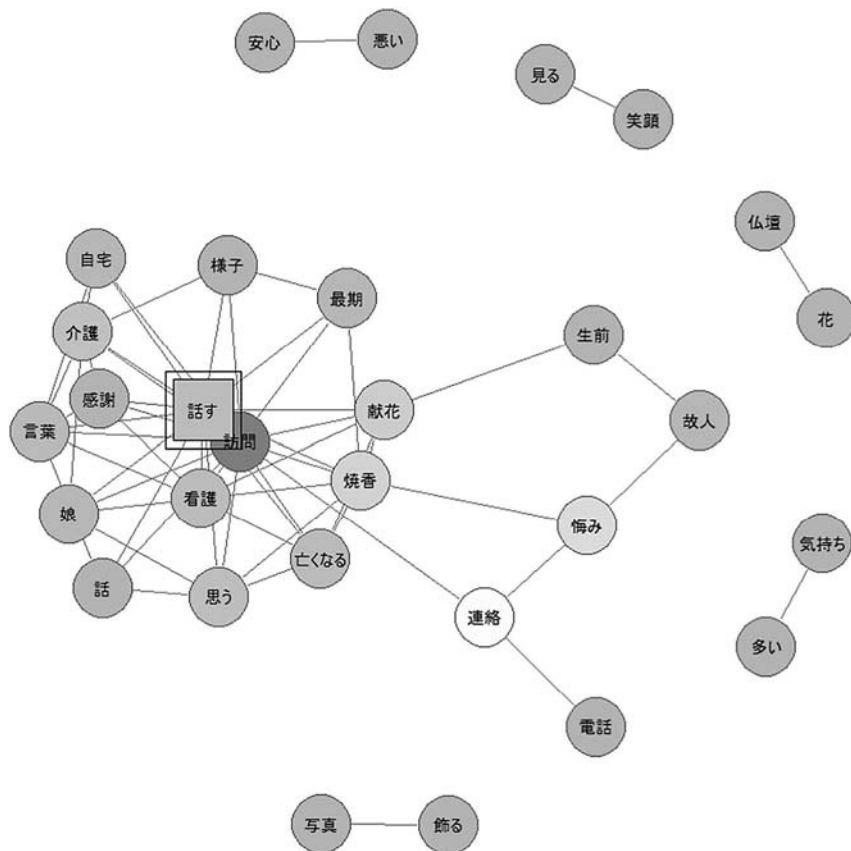


図3 「話す」の共起ネットワーク

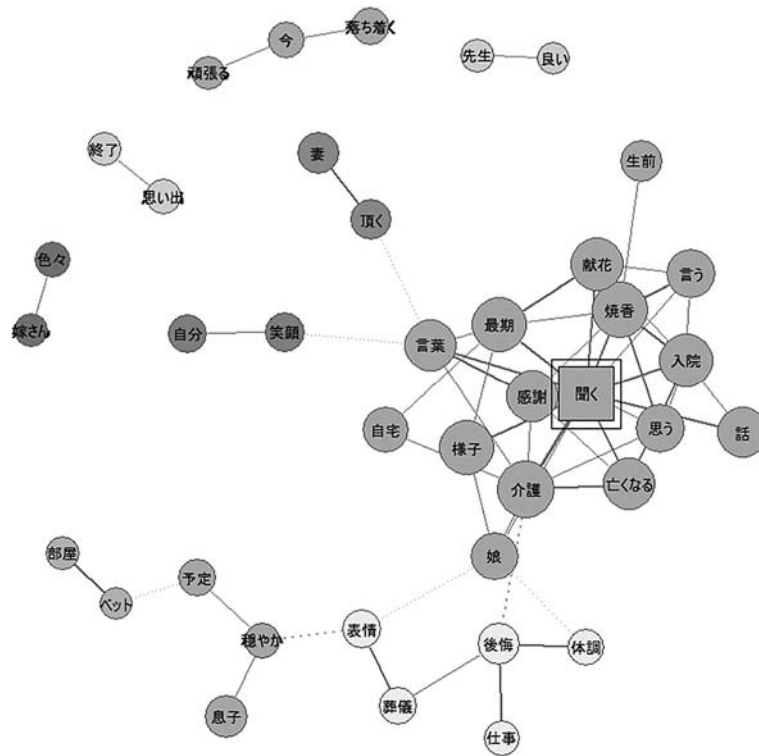


図4 「聞く」の共起ネットワーク

表1 クラスタ分析結果

	タイトル	語の個数	構成言語
クラスター1	弔問	7	焼香 献花 妻 亡くなる 言う 想う 家
クラスター2	訪問看護への感謝	10	頂く 言葉 感謝 本人 自宅 介護 訪問 看護 様子 話す
クラスター3	遺族訪問の約束	5	前 連絡 電話 個人 悔み
クラスター4	グリーフケア	11	傾聴 退院 状態 入院 希望 在宅 最期 看取る 気持ち 家族 過ごす
クラスター5	遺族の現在の様子	12	息子 今 時間 落ち着く 涙 自分 夫 生活 娘 行く 笑顔 見る
クラスター6	故人を偲ぶ	5	思い出 話 生前 写真 元気
クラスター7	遺族たち	9	行こう 退る 長男 喜ぶ 母 お世話 本当に 奥様 来る
クラスター8	葬儀後の遺族	8	奥さん 主人 今後 表情 満足 葬儀 病院 聞く

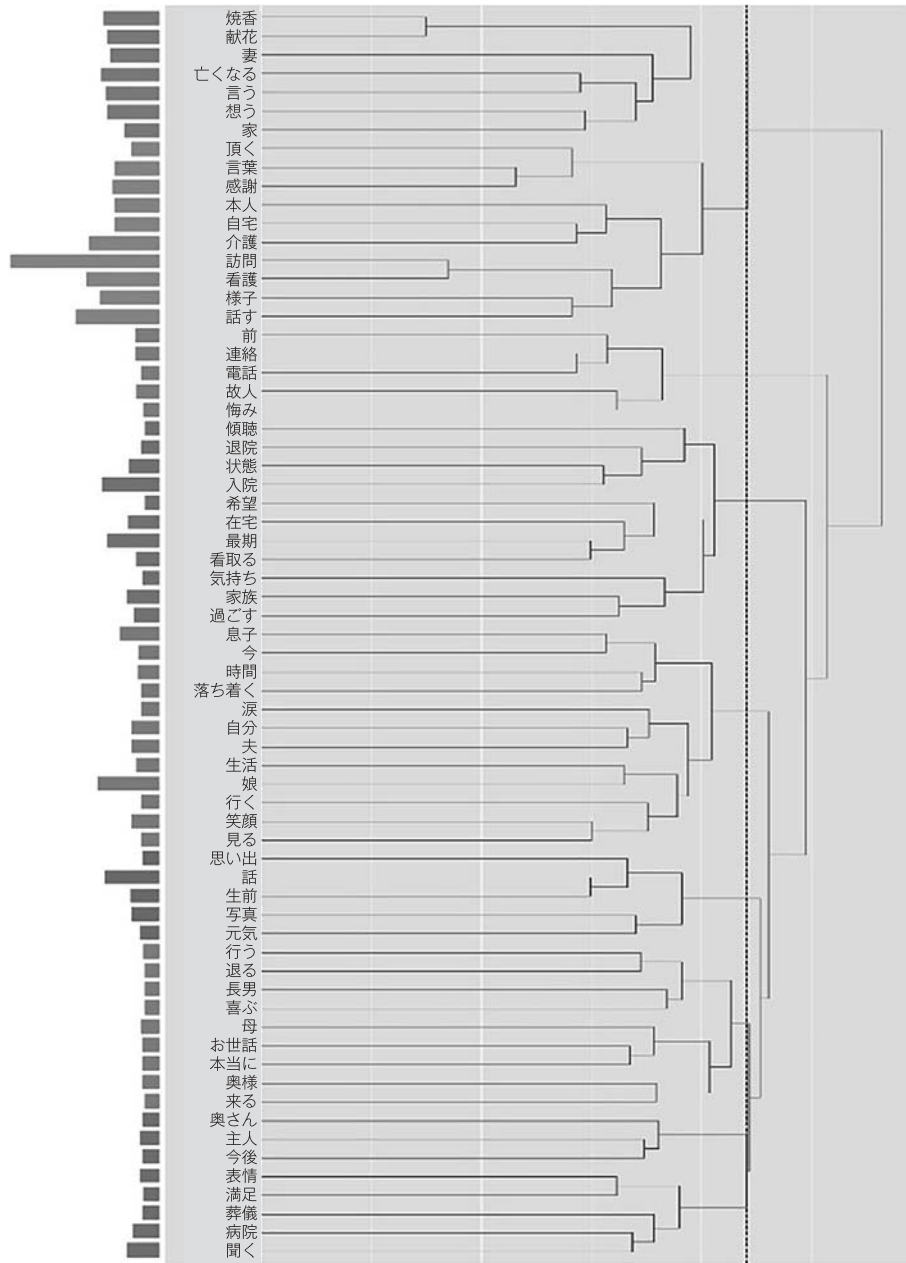


図5 階層的クラスター分析によるデンドログラム

V. 考 察

訪問看護師が行っていた【グリーフケア】の具体的な内容としては、「希望」した「入院」や「退院」「在宅」などでの「最期」の時を「過ごす」療養者を、「看取る」「家族」の「気持ち」を「傾聴」することに要約された。「聞く」の共起ネットワークで、さらに「娘」「介護」「様子」などの言葉も傾聴した内容として現れている。さらにクラスター分析では看取り期だけではなく、逝去された後の【葬儀後の遺族】の様子や【遺族の現在の様子】をも聞いており、慌しく過ぎ

たであろう葬式の中などの行事や手続きの中、ゆっくりと自身の内面と向き合えなかった遺族たちに感情の吐露を促し、遺族のグリーフワークの支援を行っている様子も伺えた。

A 訪問看護ステーションでは看取りの場所が施設であれ在宅であれ、関わった療養者には遺族訪問を試みている。身体反応が刻々と変化する看取り期において、一人の人間の死にあたり、周辺にいる人々は緊張を強いられ心身ともにストレスフルな状態にある。このような状態下にあった遺族に対して、その時を振り返ってもらい様々な思いを語ってもらうことは心情の

整理となり、悲嘆プロセスにある遺族のグリーフワークを支援する大切なケアとなっていた。

さらに、グリーフケア用紙内に記載されていた言語は、看護師自身が主語になる言葉と遺族たちが主語になる言葉の割合が半数ずつであった。つまり、訪問看護師が行った活動は傾聴ばかりではなく、「聞く」などの受動的なもの、「言う」などの能動的なものを織り交ぜながら遺族訪問とグリーフケアを行っていたことが分かる。看取り後の遺族は生活を再建する中で「あすればよかった」「もっとこうしてあげたかった」など、一旦は落ち着いた気持ちになっていたとしても、少しの刺激で動揺し後悔の念にさいなまれることがある。このような遺族に対して、終末期とともに伴走した訪問看護師からのメッセージは何よりも重く受け止められ、その言葉により遺族たちに看取りに対する価値の再評価が積極的に行われ、グリーフケア中の「話す」ことは「聞く」ことと同様に揺れる遺族の心的ケアになっていたことになる。

本研究において、遺族訪問は非常に慎重に行われていたことが分かった。クラスター3は【遺族訪問の約束】であったが、訪問看護師たちは療養者の死別にて契約は終了してしまった家に「悔み」を述べながら、多忙な遺族たちに丁寧に約束を取りつけて訪問していた。「訪問」の共起ネットワーク内においても、「前」「電話」「連絡」「悔み」が関連づいてプロットされている。訪問が前提の看護活動では訪問の約束を行うことは日常的なことであるが、大切な人を亡くし、喪に服している遺族たちに今現在話が出来た状態であるのか、むしろ話をしたい時期なのかということを訪問「前」に電話できちんと査定し、約束を取り付け、より慎重に訪問を行っている。このような、より丁寧な訪問は喪中のマナーとして理解できる側面もあるが、訪問予定の遺族がどれだけ他者や社会に目を向けられているか、言わば内にこもっているような状態であれば、それを複雑性悲嘆の徴候としてスクリーニングする側面もある。

訪問時には【弔問】として「献花」「焼香」が行われていた。「献花」「焼香」に関してはおおよそセットで共起ネットワークに現れており、遺族訪問の際には「献花」「焼香」が常態化していたと思われる。【弔問】の儀式としてこの「献花」「焼香」は故人の死を悼むことを表現し、その後の遺族へのグリーフケア導入として通過儀礼になっていたと思われる。訪問看護師たちによるこの儀礼により、故人に敬意を表し花や香を捧げる行為が【遺族たち】を慰め、この行為自体が遺

族訪問によるグリーフケアの第一歩となっていた。

さらに、これらの行為が意外な副産物を作り出していることも分かった。故人に「献花」「焼香」を行うことは祭られてある仏壇やそこに飾られている遺影や故人が大切にしていたものを見る機会ともなる。このような遺品や遺影を見るということは、訪問看護師にとっては故人の新たな側面を発見する機会となっており、看護師の喜びにつながっていた。また、その発見が遺族たちにとって想わぬ癒しへとつながっていることも考えられた。つまり、「献花」「焼香」に際して「仏壇」に「花」や「写真」を「飾る」などの視点の先に遺影や遺品があり、それは故人の病気ではない「元気」な頃の姿を見られる貴重な時間でもあり、病気や療養後からの顔しか知らない看護師にとってはそれ以外の顔を見られることは自身の行ってきたケアがその人らしいものであったか評価できる題材ともなる。仏壇に飾られてあるものを見渡し、「生前」「思い出」「話」をきっかけとして、故人が活き活きと人生を送っていたときのことを遺族とともに回顧することは遺族とともに【故人を偲ぶ】というグリーフワークとなりうる。

「感謝」という言葉に関しては、「訪問」「看護」に付帯して現われ、クラスター2の【訪問看護への感謝】においても同様な結果が得られている。訪問を受け入れてくれる遺族の大半は訪問看護にプラスの感情を持っており、遺族訪問時様々な思いを聞くなかで、「訪問」「看護」に対する「感謝」の念を表現されることが多いのではないかと思われる。しかし、遺族訪問を受け入れない遺族、つまり、看取り期において、支援者たちに何らかの禍根を残した遺族、あるいは未だに死そのものが受け入れられない遺族、そのような方々にこそグリーフケアの手が必要になることもある。訪問看護師に訪問を受け入れないケースにおいても、支援が必要となれば遺族の見守りについては地域包括支援センターなど連携を取り、地域の中で支えていく必要性については先行研究でも指摘されている⁵⁾。

A 訪問看護ステーションの訪問看護師によって多くのグリーフケアの実践記録が書かれていた。A 訪問看護ステーションにおいて遺族訪問・グリーフケアは業務のひとつと位置づけられているため、その結果を記録に残すのは仕事と捉えていることも事実であるが、遺族訪問・グリーフケアの実施結果として、生前の故人の話や訪問した遺族の様子やその時沸き起こった看護師自身の感情など多くの言葉が書き残されており、業務といった義務的な側面以外にも、書くことで

自身の感情や行ってきた看護が整理される場所があったのではないかと推察される。家族同様、訪問看護師にとって担当した療養者との別れは辛いものであり、遺族とともに悲しみを分かち合う、故人を偲ぶという時間は訪問看護師たちにとって価値ある時間になっていると考える。加えて、その遺族訪問より得られたことを書き記すことは、訪問看護師にとっての自身のケアを省察する時間ともなっている。この省察についてはドナルド・A・ショーンが1980年代よりその重要性を指摘しており、さらに、振り返る時間とともにそれを書き記すということは看護師自身の実践を自ら粹づけることにつながり、省察的実践者の教育上、非常に意義深いものであると指摘されている⁶⁾。

VI. 結 論

訪問看護師は丁寧な【遺族訪問の約束】を行い、【遺族たち】と【故人を偲ぶ】ことで【グリーフケア】を行っていた。グリーフケアを行い、また書き記すということは遺族とともに大切な人を亡くした当事者として訪問看護師として大切な時間となっていた。

本研究は「平成29年度日本訪問看護財団 訪問看護等在宅ケア研究助成」を受けて行った研究結果である。

引用文献

- 1) 川添高志, 山田雅子. 新卒看護師のための訪問看護事業所促進プログラム開発に関する調査研究(平成26年度一般社団法人全国訪問看護事業協会研究事業). 東京: きらきら訪問ナース研究会; 2015. p. 2-3.
- 2) 日本看護協会出版会編集. 平成27年看護関係統計資料集. 東京: 日本看護協会出版会; 2016. [引用2018-02-14] URL: <https://www.nurse.or.jp/home/statistics/index.html>
- 3) 柴田滋子. 日本における訪問看護師のバーンアウト研究の動向と課題——病院看護師との比較から——. 日本農村医学会雑誌 2016; 65(4): 29-37.
- 4) 前掲書3)
- 5) ドナルド・A・ショーン著, 柳沢昌一, 村田晶子監訳. 省察的実践者の教育. 東京: 鳳書房; 2017. p. 3-9.
- 6) 工藤朋子, 古瀬みどり. 訪問看護師が捉えた利用者遺族を地域で支える上での課題. Palliative Care Research 2016; 11(2): 201-8.